



短歌を読む

志貴皇子
しきのみこ

石走る垂水の上のさわらびの萌えいずる春になりにけるかも
いわばし たるみ

大江千里
おおえのちさと

月見れば千々に物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど
ちぢ

坂上 是則
さかのうえの これのり

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪
ありあけ よしの しらゆき

柿本 人麻呂
かきのもの ひとまろ

東の野にかぎろいの立つ見えてかえり見すれば月かたぶきぬ
ひんがし

良寛
りようかん

五月雨の晴れ間にいでてながむれば青田すずしく風わたるなり
さみだれ

橘 曙覧
たちばな あけみ

たのしみはまれに魚煮て児等皆がうましうましといいて食う時
うおに こらみな

石川 啄木
いしかわ たくぼく

たわむれに母を背負いて
そのあまり軽きに泣きて
三步あゆまず
せ かろ な

伊藤 左千夫
いとう さちお

両親の四つの腕に七人の子を掻きいだき坂路登るも
ふたおや よ かいな ななたり か みち